

< 紹介 >

金沢大学資料館『石川県専門学校洋書目録 明治日本の近代化に貢献した洋書』 (金沢大学資料館目録2)2004年8月

谷本 宗生*

金沢大学資料館は、「金沢大学における学術研究資料を系統的に収集、整理及び保存し、教育研究に資することを目的と」(金沢大学資料館規程第2条)して、1989(平成元)年4月に設立された学内共同利用施設である。主な収蔵資料は、暁烏敏の陶磁器コレクションをはじめとした美術資料、小中屋文書をはじめとした古文書資料、北陸人類学会収集資料をはじめとした考古学資料、第四高等学校の物理機器をはじめとした科学技術史資料、そして前身校を含む大学行政・法人文書資料などである。

資料館が所蔵する第四高等学校物理機器92点(音響学関係機器7点、光学関係機器27点、熱学関係機器5点、電磁気学関係機器47点、重学関係機器6点)については、資料館資料目録1として、『金沢大学資料館収蔵 第四高等学校物理機器図録』2004年1月に図解入りで簡潔にまとめられている。図録作成以前は、明治期に購入された多くの物理機器については購入年を特定する資料が乏しかったが、金沢大学文・法・経済学部の書類庫に保存されていて新たに資料館に移管された第四高等中学校関係文書のひとつ「旧石川県専門学校敷地並資産引継書類及目録」(1888年)によって、石川県専門学校(明治14~20年)で機器242点が購入されたことが判明したという。

この四高物理機器の図録に引き続いて、資料館目録2として編集発行されたものが『石川県専門学校洋書目録』である。これは、先にも触れた文・法・経済学部の書類庫に保存されていた四高関係文書の「旧石川県専門学校

敷地並資産引継書類及目録」を基に、「第四高等中学校洋書支給命令票」や『第四高等中学校洋書目録』などを加味して、板垣英治(資料館客員研究員、金沢大学名誉教授)が金沢大学附属図書館・石川県立図書館・石川県立金沢泉丘高等学校図書館の蔵書調査を実際に地道に行った結果である。それによって、現存する石川県専門学校の洋書は418種類575冊であることが判明したという。筆者(谷本)がかつて『第四高等学校関係資料リスト』(1999年)を編集作成するために文・法・経済学部の書類庫を確認した際には、「旧石川県専門学校敷地並資産引継書類及目録」の存在には気付いていなかった。

この洋書目録をとおしてみると、当時としては法・理・文学部の全般にわたる専門書の一覧を確認することができる。筆者の専攻分野である教育学に関しても、スペンサーやジョホットらの「教育学」が挙げられる(37頁)。1881年7月、中学師範学校の教則改正して設置された石川県専門学校(予備科3年、法学科:日本法律・英国法律・仏国法律・羅馬法律・列国交際法・法律・心理学・論理学・歴史・和漢文、理学科:物理学・地文学・地質学・金石学・植物学・動物学・生理学・数学・図画、文学科:和漢文・英文・歴史・論理学・政治学・経済学・哲学3年)の教育水準の高さがこれだろうかである。

当時の石川県専門学校について、その出身者で“加賀の三太郎”の一人として知られる西田幾多郎は「金沢には石川県専門学校といふ学校があつた。…明治の初年或は旧藩の頃から設立せられたもので、名は色々変つ

たらしいが、当時に於て外国語で専門の学業を授ける学校であつた。東京を除いて、地方では、その頃、此の種の学校は殆んど他になかつたらうと思ふ。」(西田幾多郎「山本晁水君の思出」『西田幾多郎全集』第12巻、1966年、245頁)と証言する。実際に、石川県専門学校では専門の洋書類を教科書として多数冊購入して、生徒に有料で貸し出して授業を行っていたようである。高価なうえ取り寄せが非常に困難であった洋書教科書類を生徒らのために学校が大量に購入して、その便宜を取り計らうという教育サービスを実施していたことになる。

板垣の今回の調査によって、石川県専門学校の前身にあたるとされる加賀藩の壮猷館などで購入された文献40冊ほども確認されたという。教育史的には、江戸期の藩校などと明治期の専門学校とを単純に直結してみることは当然ながら異論もあるが、残され引き継がれてきた文献図書(洋書類)という書誌学上では、地元の教育機関としての歴史的な系譜はこれをもって確かに認められよう(5頁)。加えて、なぜ石川県専門学校の洋書類が金沢大学附属図書館、石川県立金沢泉丘高等学校図書館、石川県立図書館に存在していたのかを改めて考える必要がある。石川県専門学校を母体にして第四高等学校が設立されて、その後第四高等学校へと改称され、現在の金沢大学へと統合されていくという近代以降の石川県教育史の大きな流れがある。いっぽうで、石川県専門学校蔵書の一部は石川県へと移り、さらには石川県尋常中学校へ、または石川県立商品館へと移管された歴史もわずかながらもたしかにあったわけである。

本洋書目録を使用することにより、従来教育学史等に記載されている明治初期の高等教育の姿、- 具体的には学校の課程表(時間

表)に書かれた書籍、例えば「ホーセット氏経済学」は Fawcett, Millicent Gawett, Political Economy, Tokio, 1883., 「ダナー氏金石学」は Dana, James Dwight, Manual of Mineralogy, New Haven, 1877., であることが読み取られ、これらの書籍を直接手にとって読むことが可能である - をより一層深く研究することができる。当時の多くの教育機関は、ほぼ同じ書籍を使用していたことから、全国的な規模での解析を可能にするものである。

最後に、いくつかのことを今後の課題として要望したい。石川県専門学校に限らず、その後の第四高等学校の洋書教科書類についても明かにしてもらえれば幸いである。また、石川県専門学校や第四高等学校時代に学んだ生徒らの講義ノートなどについても所在確認してもらいたい。当時の専門教育の授業が実際にどのように行われていたのか、教科書及びノートなどからその実態解明を目指してほしい。この目録のサブタイトルにも挙げられている「明治日本の近代化に貢献した洋書」という意味合いはとても重要であると思われる。たとえば、1887年10月に第四高等学校が設立された際、森下森八ら地元有志者が新刊であった英国製の『エンサイクロペディアブリタニカ』の一部献本を四高に対して行っているが、それはまさに「始終高等学校ノ完全ナランコトニ助力シ、延テ全県教育ノ盛況ニ至ラン」(文相森有礼の祝辞)という地域社会全体の発展向上を示唆するものであったにちがいない。

*東京大学史史料室